

中部信州ブナ林の植生 (3) —— 南安曇郡南部 ——

横内 正・横内文人

T. & F. Yokouchi : Beech forests in the middle part of Prov. Shinshu, Japan (3)

1. はじめに

著者等は中部信州に残存しているブナ林の植生調査を、第1年次（東筑摩郡北部）、第2年次（東筑摩郡南部・小県郡西部）と行い、5ヶ所10方形区の資料を報告した（横内正・横内文1986, 1987）。それに続き、第3年次として南安曇郡南部である安曇村島々谷に生育しているブナ林について調査を行ったので報告する。

本研究のために横内文人に対し発明・発見助成金を交付された財団法人長野県科学振興会に感謝申し上げます。

2. 調査方法

調査はZM植物社会学の調査法によって行った。現地における調査手順の概略は、以下に示す通りである。
①ブナ林の選定 ②群落内に出現する種のリストアップ ③被度・群度の判定 ④群落断面模式図の作成 ⑤立地条件等の記録

3. 調査地概況

調査を行った島々谷南沢は、安曇村の徳本峠から端を発し、島々で梓川に注ぐ島々谷川によって形成されたV字形の溪谷である。

溪谷に沿って森林鉄道のあとが確認でき、また、所々に炭焼き小屋の跡が見られ、この谷が林産資源を提供する重要な地域であったことをうかがわせる。松本宮林署での聞き取り調査結果は次の様である。林鉄は、安曇村大野田の貯木場を出発点とし、1901年（明治33年）に敷設され、総延長13kmであった。二俣から島々谷いわな留方面へと延びていた。1945年（昭和20年）の大水害で大規模の損傷を受け、そのまま廃線となった。当時は、コメツガ、トウヒ、シラビソ、モミ、ヒノキ、サワラ等の常緑高木を伐採し運搬していたがブナは利用価値が無く、伐採対象木ではなかったので、切った事実は無いという。

島々から林鉄跡に沿った徳本峠登山道を登って行くと溪谷特有の群落を観察できる。河川の近くにはタマアジサイーフサザクラ群集、フジシダーサワラ群集、ジュウモンジシダーサワグルミ群集などの溪谷林が見られ、その上部の斜面には、ヒロハカツラ群落、ケヤキ群落、ブナ群落などの湿生・中生林が

見られる。さらに、上部の斜面や尾根筋には、ツバメオモトーウラジロモミ群落やホンシャクナゲヒノキ群集等の中生・乾生林を見る事ができる。急峻な岩壁が一気に溪谷に落ちる景観は見事であり、湿生から乾生までの植生が一望できるというこの谷の特徴を形作っている。

4. 調査結果及び考察 (Tab. 3)

(1) 南安曇郡安曇村島々谷南沢(標高1450~1680m)
5万図：上高地右下

島々谷のブナ林は、徳本峠から端を発する南沢の左岸の斜面で認めることができる。隣接群落はコメツガ林であり、コメツガ林域の一部にモザイク状にブナ林が成立している。高木層は樹高20m以上あり、植被率は70~90%でブナを優占している。その中にコメツガ、シラビソ、ウラジロモミなどの針葉樹が混交している。亜高木層・低木層には、ハウチワカエデ、オオカメノキ、シナノキなどの広葉樹とともに、シラビソ、コメツガなどの針葉樹類がまじって生育している。草本層は、植被率50%~70%と比較的、広面積に林床が被われている。優占種は、ナライシダ、ヤグルマソウなどで、一部にはクマイザサが優占している場所も確認された。

群落の立地している環境は、傾斜角が30°~40°とやや急な斜面ではあるが、土壌は肥沃で、大きな礫も少なく、安定した斜面であるといえる。斜面の向きは南から南東の方向で、適湿地である。このような環境は、県北部のブナ純林が発達している地域環境とよく類似している。

標高は1500~1700mの範囲にあり、ブナの生育できるゾーンから考えると、ブナ林としては、かなり上部に位置している群落であると言える。羽田他(1979)で報告されているオオシラビソブナ群落は、ブナ林の中でも上限に当り、特徴的な標徴種を持たず、亜高山帯の種群によって区分される群落とされている。和田(1982)では、ブナクラスからコケモモ・トウヒクラスへの移行帯であるとされている。当調査で得た資料の中にはコヨウラクツツジ、タケシマラン、タケカンバ、ゴゼンタチバナなどの亜高山帯の構成種群が出現し、オオシラビソブナ群落と

Tab. 3 中部信州ブナ林の群落組成表 (3)

調査番号	11	12	13	14	ノギラン	K	+	•	+	+
調査年月日	'87	'87	'87	'87	シシガシラ	K	+	+	•	+2
	8	8	8	8	ユキザサ	K	+	+	+	•
	8	8	9	9	ミヤマワラビ	K	+	+	•	+2
海 拔 高(m)	1450	1470	1680	1530	ソバナ	K	•	+	+	+
方 位	S60E	E	S65E	S10E	エンレイソウ	K	•	+	+	+
傾 斜(°)	35	35	30	40	ウラジロモミ	B-1	2・3	2・2	•	•
面 積(m ²)	225	400	400	100		B-2	+	2・2	•	•
高木層の高さ(m)	20	23	25	22	シナノザサ	S, K	1・2	4・5	•	•
高木層の植被率(%)	90	80	80	70	ウワミズザクラ	S	+2	•	•	+
亜高木層の高さ(m)	8	10	13	10	オシダ	K	+2	+	•	•
亜高木層の植被率(%)	30	20	40	10	ツルシキミ	K	+	•	+2	•
低木層の高さ(m)	3	1.5	1.5	2	ヤマアジサイ	S, K	±	+2	•	•
低木層の植被率(%)	40	30	40	40	ツルツゲ	K	+	+2	•	•
草本層の高さ(m)	1.0	0.5	0.8	0.5	イワガラミ	K	+	•	•	2・3
草本層の植被率(%)	70	80	80	50	シノブカグマ	K	•	2・2	1・2	•
出現種数	35	31	38	39	シラビソ	B-1	•	•	1・1	•
						B-2	•	•	1・1	•
ブナ	B-1	3・3	3・4	3・3	3・3	S	•	•	+	1・2
	B-2, S	•	±	+2	1・1	コヨウラクツツジ	S	•	•	+2
ハウチワカエデ	B-2	+	1・2	•	1・1	コシアブラ	S	•	•	1・2
	S	+	+	1・2	•	ナナカマド	K	•	•	+
オオカメノキ	B-2, S	+	2・2	1・2	±	タケシマラン	K	•	•	+
シナノキ	B-1, B-2	±	•	•	1・1	カニコウモリ	K	•	•	+
	S	+	(+)	+	•	サラシナショウマ	K	•	•	+
テツカエデ	S, K	+	+	±	+2	出現1回の種				
イワガラミ	B-2, S	•	+	•	±					
	K	+2	+	1・2	•	No.11; クロベB-2-+, ヤマブドウS-+, ムラサキ				
ミヤマカンズゲ	K	2・2	+2	2・2	+	ヤシオツツジS-1・1, トチバニンジンK-+, クルマ				
アキノキリンソウ	K	+	+	+	+	バナK-+				
ヤグルマソウ	K	+2	3・4	+	+	No.12; イヌガンソクK-+2, センジュガンピK-+,				
ヤマソテツ	K	+2	+2	1・2	+	コウシンヤマハッカK-+, オオバギボウシK-+, ミソ				
ツバメオモト	K	+2	+	+	+	ガワソウK-+, ノリクアラザミK-+, ハハヤマボクチ				
トチノキ	B-1, K	1・1	1・1	•	±	K-+, クルマバソウK-+				
コメツガ	B-1	•	•	2・2	2・2	No.13; ダケカンバB-1-1・2, コミネカエデS-2・				
	B-2, S	+	•	2・2	±	2, ノリウツギS-+, ヒロハツリバナS-+, ツクバネ				
ミネカエデ	S	+2	+	•	+	ソウS-+・2, ゴゼンタチバナK-+, ミヤマシグレK				
アオダモ	S	2・3	1・2	•	2・2	-+, ミヤマカタバミK-+				
ナライシダ	S	3・3	•	3・2	1・2	No.14; ハリギリS-+, ヒメコマツS-+, キタゴヨウ				
マイヅルソウ	K	+2	•	+	+2	S-+, ミヤマガマズミS-+, スノキK-+, ノガリヤ				
ホソバトウゲシバ	K	+	•	+2	+	S-+, フクオウソウK-+				

調査地: No.11~14 南安曇郡安曇村島々谷南沢

の類似性がうかがわれる。しかし、羽田他(1979)で報告されているものは、長野県北部を中心とした資料であるのに対し、当調査で得た資料は長野県の中央部のものである。現在のところ、はっきりしないが、今後詳細な比較検討を加えていきたい。

また、資料中には、ナライシダ、ユキザサ、ツルシキミ等のヒメアオキーブナ群集を特徴づける種群

も出現している。同群集との比較検討も興味深い問題である。

5. 参考文献 (第2報へ追加分)

横内 正・横内文人(1987): 中部信州ブナ林の
植生(2)一東筑摩郡南部・小県郡西部, 長
野植研誌 20; p. 87~89

羽田他(1979): 長野県の現存植生 412 pp., 長野県